

漱石文学の思想

第一部

自己形成の苦悩

今西順吉

筑摩書房

漱石文学の思想

第一部

自己形成の苦悩

今西順吉

筑摩書房

今西順吉 (いまにし じゅんきち)

1935年、東京都に生まれる。

1957年、東京大学文学部印度哲学梵文学科を卒業。

東京大学大学院修士課程・博士課程を経て、1964

年～1966年、西ドイツ・ゲッティンゲン大学留学。

現在 北海道大学教授。

著書・論文

「マードヴァ『全哲学綱要』の一考察——第14

章『サーンキヤ哲学』の文献学的研究——」

(『古代学』12-2), 「初期中観派におけるサー

ンキヤ思想1&2」(『北海道大学文学部紀要』14

-2; 18-1), 「ヨーガ学派の心作用論」(『印度

学仏教学研究』32-2), Abhidharmatexte in

Sanskrit aus den Turfanfunden I & II

(Nachrichten der Akademie der Wissen-

schaften in Göttingen), 「鷗外とアショーカー

王研究」(『仏教の歴史的展開に見る諸形態』創

文社), 「アショーカー王研究」(『大乘仏教から密

教へ』春秋社), 「我と無我」(『印度哲学仏教学』

1), 「言語世界の構造とその破壊——『中論』

の言語哲学について」(『印度哲学仏教学』2),

「『中論』の原典について」(『仏教思想史論集』

成田山仏教研究所), その他多数。

漱石文学の思想 第一部

1988年8月30日 初版第1刷発行

著 者 今 西 順 吉

発 行 者 関 根 栄 郷

発 行 所 株式
会社 筑 摩 書 房

101 東京都千代田区神田小川町2の8

電 話 東 京 (291) 7651 (営業)

東 京 (294) 6711 (編集)

振 替 東 京 6-4123

印刷・株式会社 厚 徳 社

製本・矢嶋製本株式会社

© 1988 Junkichi Imanishi

ISBN4-480-82232-1 C0095

Printed in Japan

乱丁・落丁本の場合は、ご面倒ですが、小社読者係宛にご
送付ください。送料小社負担にてお取り替えいたします。

目次

序説 漱石とは誰か

はじめに

一 「則天去私」を指標とする立場

二 漱石と精神病

三 「漱石の恋人」論

A 銀杏返しにたけながの女

B 嫂 登世

C 大塚楠緒子

D 柳橋の女

E 日根野れん

F その他の女性

四 漱石とは誰か

65

第二章 作家以前

一 生い立ち

71

二 第一中学時代の夢

95

三 二松学舎における決断

106

四 母の死から復籍まで

119

五 道德会批判

130

六 昏迷

141

七 智の立場

143

八 厭世

150

九 箱根行

163

十 「狂なるかな狂なるかな」(上)

178

1 露伴の文学観

182

2	鷗外の初期の文学観
3	北村透谷における恋愛と人生
4	西田幾多郎・和辻哲郎・田山花袋
11	「狂なるかな狂なるかな」(下)
12	嫂の死をめぐって
13	自然喪失
14	『方丈記』批評
15	「老子の哲学」
16	「文壇に於ける平等主義の代表者『ウォルト・ホイットマン』 Walt Whitman の詩について」
17	「英国詩人の天地山川に対する観念」
18	参禅
19	松山行
20	熊本時代

第二章 自己本位の確立

一 英国留学への心構え

二 ロンドンにおける研究生活

三 教師生活の四年間

四 『英文学形式論』と「自己本位」の立場

五 『文学論』と「自己本位」の立場

1 『文学論』の成り立ち

2 意識論

3 文学の内容について

4 『文学論』と自己本位の立場

5 『文学論ノート』から

6 「文芸の哲学的基礎」における意識論と内面性

7 「作家の態度」における意識論と内面性

8 「自己本位」の意味

六 漱石の「自然」

七 余裕——自然主義文学に対する批判の思想的根拠
あとがき

漱石文学の思想

第一部 自己形成の苦悩

中村 元先生に捧ぐ

序説 漱石とは誰か

はじめに

夏目漱石は日本人の間でもっとも広く読まれている作家であろう。その全集が繰り返し出版されているばかりでなく、現代日本文学の様々な全集においても欠くことの出来ない存在である。⁽¹⁾漱石文学を「国民文学」と呼ぶことも稀ではないほどに、老若男女を問わず親しまれ、愛読されている。これだけ広い読者層をもつ作家も珍しいと言わねばならない。

漱石の作家活動は明治三十年代の後半に始まるが、ただちに当時の知識人や学生達を魅了して、その熱い共感が今日にまで及んでいる。昭和十年十一月の雑誌『思想』は「特輯 漱石記念号」であるが、漱石没後約二十年の状況について評論家河上徹太郎氏は次のように述べている。

漱石の読者は未だに減じない。彼の全集は、漸く中年期に入つて実生活上の安定を身心共に得た年配の人の応接間には、百科辞典はななくとも必ず備はつてゐるし、降つて我々或はそれ以下の青年で、その人生の決定的な時期に唯物弁証法の猛烈な氾濫を浴びた人々の中にも新しい読者を次々に獲得してゆくのは顕著な現象である。⁽²⁾

それからさらに五十年以上を経た今日、日本の歴史は未曾有の困難とその後の繁栄の時代を経

驗したが、漱石に対する関心は少しも衰えを見せるどころか、日本人の心の中に占める漱石の位置の重みは一層増していると言つても過言ではないであろう。一体漱石の何がこれほどわれわれをひきつけるのであろうか。

この疑問に対する一つの解答は漱石作品がどのように読まれて来たかを顧みることによつて与えられるであろう。漱石について語る人々は多くの場合特定の作品に対する好みを口にする。

『坊つちゃん』や『吾輩は猫である』のユーモアや文明批評、『草枕』の風流、『三四郎』の青春像と広田先生の文明批評、『それから』の苦惱する知識人、『門』以下の諸作品における求道精神等々が取り上げられて来た。

どの作品を取り上げても胸に迫るものがあり、それらを読んだ日の強烈な印象は忘れ難く心に残っている。のみならず同様な感動を、作品が発表された当時の読者達も新鮮な驚きをもつて味わっていた。例えば『猫』について語る当時の人々の文章は、そのままその人の青春の大切な一齣をも語っているのである。漱石作品が永く読み継がれるならば、それについて語るこれらの文章もまた読み継がれることであろう。われわれは漱石作品を通じて、漱石以後のわれわれが何かを共有しているという実感をもっている。漱石文学を国民文学と呼ぶとするならば、その根拠はこの点に求められるであろう。駐日ドイツ大使であつたゾルフは『草枕』の英訳を読んで、その感想を訳者佐々木梅治に次のように述べている。

私は直ぐに漱石の『草枕』の貴訳を読みました。単に読んだばかりでなく實際勉強しました。私は既に『吾輩は猫である』の大部分を英訳で知つて居り、また英訳及独訳（シュパ）で『坊つちゃん』を読んでゐました。その凡ての作品は夏目氏が時々ジョージ・メレ

デイスに比較されてゐるにも拘らず此の人よりも尚一層高く評価さるべきである事を私に訓へます。といふのは彼はメレデイスが自分の国に与へたよりも実に一層広いそして一層永続的な影響を日本にもたらしてゐるからであります。⁽³⁾

しからばわれわれは漱石文学において何を讀み、何を共有していると実感しているのかという問題が起こる。この点になると、漱石の研究家の間でも意見は区々に分かれる。確かに漱石作品を一つひとつについて見るならば、それぞれが固有の特色をもっているが、それらがどのような内的関係にあるのか、作品群は全体としてどのように相互に位置づけられるのか。作者漱石の中心にあった問題が何であり、それを個々の作品の中でどのように表現しようとしているのか。こういう最も本質的な問題になると、われわれを満足させてくれる解答は与えられていない。その実態を知るには江藤淳編『朝日小事典 夏目漱石』（朝日新聞社、一九七七年）が便利である。漱石の重要な作品の殆んど全部について、代表的な漱石研究者の間で解釈が区々であることが簡明に指摘されている。今日、漱石研究の論文・著書は文字通り汗牛充棟の觀を呈しており、⁽⁴⁾漱石研究の現段階を全体的に把握することは、専門外の者には不可能に近い。しかし漱石の核心的な部分がなお未解明であるという指摘は極めて重大な意味を持つと言わねばならない。

そこで、これまでの漱石研究において取り上げられた主要な三つの立場を再検討してみたい。

(1) 漱石作品の書誌学的研究は未開拓な分野であるが、矢口進也『漱石全集物語』（青英舎、一九八五年）は貴重な労作である。なおこのような研究の重要性については、マサオ・ミヨシ「アメリカからみた日本の漱石研究」、平川祐弘「漱石研究の量と質——編者の反省——」（共に『講座 夏目漱石』

第五卷、有斐閣、昭和五十七年）を参照。

(2) 河上徹太郎「漱石一面」、『思想』昭和十年十一月号、五八頁。

(3) ソルフ「漱石を読みて」、『漱石全集月報』第一号、昭和三年三月、一頁Ⅱ『月報』三頁。

(4) 研究書、研究論文の目録類は、全集や作品集に付せられている。また近年は国文学研究誌が定期的に目録を整備している。

一 「則天去私」を指標とする立場

漱石の周囲に若い学生達が集まるようになる、木曜日を面会日と定めて、定期的に会合が持たれるようになった。その席では様々な問題が話題となったが、漱石の作品も論議の中心となった。その様子は森田草平『夏目漱石』『続夏目漱石』が比較的詳しく紹介している。しかし芸術家は自作の解説を、本質的な意味においては、しないものであるから、その論議を通じてみても、作品に描かれている以上のことについては、漱石は余り多くを語っていない。それでも記録としての意味は大きい。それについては本論の中で取り上げることがあるであろう。

漱石の談話として、最も重要なものは大正五年十一月の木曜会で語った「則天去私」に関するものである。「則天去私」という標語は大正五年十一月刊の『^{大正六年}文章日記』に漱石の揮毫として載っており、当時の漱石の思想を知るための重要な手がかりとなるものである。しかしそのように重要な思想が、死の直前における談話としてしか語られなかったとすると、思想の内容そのものもその席にあった門下生の回想によってしか知り得ないことになるであろう。それらの回想録としては、次のものがある。

久米正雄「生活と芸術と（日記から）」（『文章倶楽部』大正五年十二月。後、『人間雑話』所収）

赤木桁平『夏目漱石』（大正六年五月）

松岡譲「漱石山房の一夜——宗教的問答——」（『現代仏教』昭和八年一月。後、『宗教的問答』と改題して『漱石先生』所収）

これらの回想によると、漱石は文学の方法として「則天去私」を語ったと言われる。それはこの標語を載せた『文章日記』の無署名の解説に、

天に則り私を去ると訓む。天は自然である。自然に従うて、私、即ち小主観小技巧を去れといふ意で、文章はあくまで自然なれ、天真流露なれ、といふ意である。

とあるのとも一致する。そして中村星湖が『新小説』の臨時号「文豪夏目漱石」(大正六年一月)に談話「天に則つて私を去る」を載せているのも同趣旨であると言つてよい。

ところが『文章日記』に載つた漱石の揮毫が漱石の作品として岩波書店版の『漱石全集』に採用されたのは、昭和五十一年刊の第十六巻、補遺(第二)⁽¹⁾が最初であつて、新書判では一九八〇年刊の第三十五巻(全巻が補遺)に収められている。この標語が余りにも有名であるのと比較するとき、不思議と言ふほかない。

この点の小宮豊隆『夏目漱石』(昭和十三年刊)⁽²⁾を検討することによつて明らかとなるであろう。小宮氏は「漱石のどの作品も、漱石の次の作品の爲の踏台になつてゐたのだと言ふことができる⁽³⁾。」という立場から、次のように述べている。

従つて私がここで努めなければならなかつたことは、その漱石の動的な生活を、動的に把握し、動的に叙述する点にあつた。もつとも一面から言へば、漱石の生活態度は、殆んど生れながらに決定されてゐた。漱石は『文学論』の中で、天才と天才でないものとを区別するものは、その生活に「核」があるかないかであると言つてゐる。漱石が自分を天才であると思つてゐたかどうかは別問題であるとしても、ともかく漱石の生活には、子供の時から、はつきりした「核」があつた。然もこの「核」は、漱石が現実に触れること深刻であればある

ほど、次第に脱皮し、次第に成長して行つた。その意味で漱石の生活の「核」の脱皮と成長とを跡づけることは、漱石の人生観・芸術観の脱皮と成長とを跡づけることである。⁽⁴⁾

小宮氏がここで述べていることは抽象的であるが、『夏目漱石』の内容に即してこれを補足すれば、漱石の「核」は発展成長して「則天去私」に到達したのである。しかも小宮氏の理解する「則天去私」とは、この標語の形をとらなくても、すでに大正三年当時、「死が僕の勝利だ。」と木曜会の席で語っていたことをとらえて、「死を目ざして進むことは、自然に随順して生き、天に則つて生きることである」と解釈していることにも見られるように、漱石の中心思想である。小宮氏は次のように述べている。

漱石は死を生の中に織り込み、生を死の中に織り込み、かうして相互に反撥し矛盾する二つのものを、一つのものに連接させたいと希つた。「則天去私」は、そのことを可能にする唯一の道であつた。「則天去私」の道が成就し、漱石の「生きんとする盲目の意志」が、道理によつて馴致され、常に道理に従つて動くやうになるならば、恐らく漱石の生と死とはなだらかに繋がり合ふことができたに違ひない。⁽⁷⁾（傍点は原文のまま）

そうして『明暗』が描き出そうとしているのは「私の塊りとしての人間」であり、「言語動作の奥に潜む私」⁽⁹⁾がこの作品において丹念に掘り出されるのは、「それらの私から超越する為の、必然な、余儀ない手段」⁽¹⁰⁾であつた、と述べている。このように、小宮氏にとって「則天去私」とは漱石が到達した悟達の境地を意味している。それが単なる文学の方法にとどまるとはとうてい小宮氏には考えられないところであつた。

「則天去私」が文学の方法なのか、それとも悟りの境地を表わすものなのか、この解釈が、門下